

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520317

研究課題名（和文） 論客としてのラシーヌ考察 ― 作品の位置づけと影響関係に関する諸問題

研究課題名（英文） Racine as a polemicist ― Considerations on the positioning of his works and the relations between the polemicists

研究代表者 柳 光子 (Mitsuko YANAGI)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：60284387

研究成果の概要（和文）：本研究課題に取り組んで以来、フランス国立図書館やパリのソーショワール図書館などで収集してきた資料をもとに、ラシーヌに関する文献のとりまとめ、彼の作品や言動が古典主義時代の文学論争に影響を与えているケースの抽出等と並行し、周辺作家のなかから、古典主義時代において「書くこと」の意義を左右したと目されるアントワーヌ・ド・クルタンの著作に重点を置きつつ、論客としてのラシーヌの位置づけを再確認した。

研究成果の概要（英文）： Based on the documents which we examined at the National Library of France and the Library of Saulchoir, we gathered the writings concerning Racine as a polemicist, extracted the cases where his works and behaviors affected the literary polemic discussions at the times of classicism; in parallel with this, to reconfirm his positioning, we focused on Antoine de Courtin whose works influenced the significance of “writing”, among writers around our polemicists.

### 交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2011年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2012年度 | 400,000   | 120,000 | 520,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ラシーヌ、文学論争、古典主義時代

#### 1. 研究開始当初の背景

17世紀フランスにおける演劇とキリス

ト教との対立史を把握する研究を過去数年にわたり行ったなかで、両者を和解させる企てという位置づけでラシーヌの後期

作品を読みなおす作業の成果を幾つかの論文にまとめた。その際に、迫害を受けるジャンセニストたちと共通する精神的支柱がラシーヌにあったことなどの論証により、作家とポール・ロワヤルとの絆の深さが再認識される一方、宗教問題にとどまらぬ様々な文学的・政治的な思惑が常に創作の背景にあることが伺われ、ラシーヌの著作が文壇で持ち得た影響力を考察する上では、これらを包括的に視野に入れる必要性が実感された。作品発表のつど飛び交った攻撃文書の数々を見ても、創作と文学論争との影響関係が密な作家のひとりであったことが推察されたため、論客としてのラシーヌ像を研究の中心に据えた。

論争文書としては、それまで主として演劇断罪論に関わる著作や書簡等を収集し分析する作業を行ってきたが、ラシーヌの主義主張との影響関係の認められる同時代の論客たちの動向を、より多角的に考察する材料を集めて論考を加えれば、古典主義時代における文学論争という事象そのものが持った一種の推進力を測ることが可能ではないかとの予想を抱くに至った。「新旧論争」をはじめとする文学史的に名高い論争や、パスカルに焦点をあてたキリスト教護教論に関するものを除けば、17世紀の論壇に関する研究には未踏の領域が残されており、丹念な資料調査を試みる余地があるものと予想されたことも研究の背景となった。

## 2. 研究の目的

古典主義時代のフランスにおける文学論争が、ラシーヌの創作活動を左右した痕

跡をたどり、論客としての言動が自作に反映された状況を分析、また作品が論争への回答として機能したと考えられる具体例を検討すること、さらにアカデミー・フランセーズにおけるラシーヌの同僚たちをはじめとする周辺の作家についても文学論争との関わりを検証し、互いの影響関係を探りつつ、当時の文学論争という事象そのものが持った一種の推進力を測ることを全体の目的とした。具体的には、次の2点に重きを置いた。

(1) 文学論争そのもの、および論争的な意味合いをもつ著作、さらにある論題への「回答」として機能し得た可能性のある作品に関して、広く文献調査を実施すること。研究経験のある演劇断罪論に関連するものを土台に、作家および作品批評、教育論、文芸規則論、詩論などを主な探索範囲とする。ここから論客としてのラシーヌの位置づけを試み、作家や論客たちの影響関係をとらえる新たな視座をもたらすこと、ならびに文学論争の果たした社会的・文化的機能を解明すること。

(2) これに伴う副次的な項目として、個々の論客たちが自説の根拠とした事項、参照・援用した作家や著作との心理的距離の推定、特定の文人による見解の長期的な変遷を実証するなどの作業を実施する。これにより、表面的には目立たない対立や連携の有無を判断しつつ、文学論争の推移を考証、個々の発言間の影響関係を明らかにすること。

## 3. 研究の方法

演劇断罪をめぐる論争に関する資料をはじめ、本研究に必要な文献の中には過去の研究によって参照済みの資料もあったが、予備調査の結果、フランス国立図書館のほか、パリのソーショワール図書館などでも資料の探索を実施すべきであることが判明した。とりわけ後者はドミニコ会が運営してきた異色の資料館であり、古典主義時代の一部の文献に関しては他の図書館では見ることのできない文献を豊富に備えている。そこを調査していないことが現時点までに行なった資料収集上の重大な欠損部分となっていることが予想されたため、同図書館での資料収集を優先的に実施し、文学論争とラシーヌの関係およびその作品の位置づけについての推論を立証するための材料を揃えていった。その他の図書館に関しても必要に応じて文献を探索、特にフランス国立図書館およびソルボンヌ大学図書館においては、事項検索が可能であることから短時間での効率的な資料収集が可能と予想され、2度にわたっての調査を行った。

文献調査と平行して、既知の資料群についても、論客としてのラシーヌの立場や意図に着目して再読を行なったが、特に個々の作品および作家や論客たちの発言に認められる影響関係については、裏づけとなる調査や作品の読みなおし作業に相応の時間を割くこととなった。アカデミーにおける演説など、時期と背景を容易に特定できる文献を中心に、文学史的に名高い論争からは外れたものと見なされてきた言論も分析の対象としたため、意外な収穫もあったが、予想以上の時間を要した。これを個々の作品を論壇への回答として読

み直す作業から得られた考察と照合し、17世紀後半の文学論争の多面的な掌握に繋げることを目指した。

#### 4. 研究成果

フランス国立図書館やソーショワール図書館等で収集した資料やマイクロフィルム化されている17世紀の文献をもとに、ラシーヌに関する文献をとりまとめ、彼の作品や言動が古典主義時代の文学論争に影響を与えているケースの抽出を行う過程で、周辺作家のなかから、古典主義時代において「書くこと」の意義に一石を投じたと目されるアントワーヌ・ド・クルタンの著作の意外な重要性に気づき、そこに重点を置きつつ、論客としてのラシーヌの位置づけを再確認した。表だった論争文書としては、後年みずから破棄しようとしたという若き日の著作しか遺していないにせよ、彼が論争家の一面を見せる機会は少なからずあり、まず当時の文人たち、次いで一般の人々の間にも「書くこと」への意識が高まりつつあったことが、ラシーヌの言動にも少なからぬ影響を与えたことが確認された。

クルタンの著作『フランスの貴紳が実践する礼儀についての新論』については、フランス国立図書館所蔵のオリジナルに遡って検討し、マイクロフィルム化されている同時代の類書も参考にしつつ、「効果的に語ること」が「効果的に書くこと」よりも優位とされてきた古典主義時代の価値観が変化しはじめた時期を推定、とりわけ重要と思われるクルタンの主張を部分的に訳出、註を施すなどの作業を行った（一部を『人文学論叢』に発表、字数の関係で残りは平成25年度に発表予定）。世俗的な指南書と思

われてきた著作のなかに、文学論争にも関  
わりの深い事項が盛り込まれており、古典  
主義時代の宮廷人達や文人たちの意識を量  
る上で有用な発見も多かった。

これらを踏まえて、ラシーヌおよび周  
辺作家たちにとっての「書くこと」の意義  
や認識を整理し、それが文学論争にどのよ  
うに影響したかについては、現在とりまと  
め中で、期間内に公表にまで至らなかった  
ことが悔やまれるが、論客・文人たちの影  
響関係にまで言及するには根拠となる資料  
が足りず、安易に結論を出すことは控えざ  
るを得なかった。十分な論拠を用意できた  
「書くこと」の意義と認識の推移について  
は、クルタンの影響を中心に、本研究課題  
の成果として平成25年度の紀要に投稿予定  
である。

また、論客としてのラシーヌ本人につ  
いても、文学論争の渦中にあったとは通常  
考えられていない時期も視野に入れての長  
期的な主義主張の変遷を追うことを目的と  
して、「書くこと」の意義をいかに捉えたか  
を中軸に、本研究の延長となる課題として  
引き続き取り組み、本研究で得た文献調査  
の成果を活かすべく、計画中である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 柳 光子、アントワーヌ・ド・クルタン  
『新礼儀作法論』より「手紙を書く際に  
守るべきこと並びに手紙の書き方指南  
(上)【訳註】、人文学論叢、査読なし、  
2012, 143-154.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

柳 光子 ( Mitsuko YANAGI )